



山の動物、里の人

小 松 守

(秋田市大森山動物園 園長)

今、日本各地でのシカ、イノシシ、クマなど野生動物増加が原因の農林業被害、人への危害、生態系破壊が多発し問題になっている。食を求めさまよう動物たちは時に市街地にまで出没するあり様だ。

人と自然、人と動物との関係性の歪み、バランスの崩れが問題の根っこにありそうだ。グローバル経済と産業構造の変化、中山間地の農林業の停滞や衰退、都市化での人口分布の変化、人の生き方や価値観の変化、さらには温暖化など、時代が動く中で起きている一現象でもある。

激しく変化する社会は、多くの課題と向き合っている。野生動物問題はその中の一つかもしれない。ただ、人と動物がせめぎ合う最前線の一つである中山間地の農山村は、日本の食や木材等を生産する重要な場でもあり、無関心ではいられない。

動物問題が少しずつ顔をのぞかせ始めたのは戦後の高度成長期を迎える頃からだろうか。産業の構造変化や貿易の自由化などの影響もあつてか、中山間地域の農林業は低迷する時代に入り、それに伴い若者は農山村から流出し、人口の減少や高齢化は確実に地域の力を衰えさせてきた。それは自然や動物と向き合う人々の力の衰えでもあった。

国土の半分近くを占める中山間地域等の農山村では食糧を生産し、林産業では森の循環を維持し、里山では多様な自然環境をつくり、そし

て下流域の人々に命の水を提供する役割をも担ってきた。農山村は物質的なものだけではなく、景観や文化を提供し、将来を担う人づくりの場ともなり、多様な機能を果している。

農山村の土地と暮らしを守るために人々は命がけで自然と向き合ってきた。恵みをもたらす自然は時に人の手には負えない怖い存在でもあり、山から攻めて来る動物は作物をかすめていくし、襲いかかる怖いものでもあった。

人々は山と動物を拝み、安寧を願いつつも、度が過ぎた時、ちゃんと懲らしめてもきた。時には捕まえ、食の対象にもしてきた。動物と向き合うこうした日本人の独特の心情は宮沢賢治の作品「なめとこ山の熊」によく表われている。

話は横道にそれるが、日本人は西洋人と異なり動物を殺し食う肉食文化をあまり発達させてこなかった。だから、動物を食う時には様々な葛藤や罪悪感を持っていたのだろう。そこからの解放のためか、獣肉を花に例えた。鹿は紅葉、猪は牡丹、馬は桜肉などと呼び、あるいは兎を鶏のように一羽、二羽と数え、肉を食う言い訳をしてきた。「いただきます」は動物に対する感謝の思いだ。西洋人が食の感謝を神に向けるのとは異なる。日本人は動物をどこか自分達と同じ「いのち」と思っているに違いない。

日本人は意外に獣肉を楽しんでいたようだが、今、私たちの食生活は豊かになり、敢えて山の動物を殺し食うことがほとんどなくなった。一

方で増殖する動物対策と健康志向の「ジビエ」はしだいに話題に上るようになってきている。新しい食文化になってほしいものだ。

閑話休題、昔、人と動物たちとの間には目に見えぬ暗黙の力関係もあり、動物たちは人が暮らす里には簡単に入っては来なかったのだろう。

しかし、人の力や意識に変化が見え始めると、息を潜め遠くから様子を窺っていた動物たちはそれに敏感に反応し、人と動物にあった境界から滲み出るようになってきた。そして大丈夫とわかるやいなや、堰を切ったように人の生活圏に流れ込み放散し始めている。

野生動物問題は、地域の社会的背景や自然環境が異なるから単純ではないが、動物の生息域拡大と増数の推移と、中山間地の農山村人口の減と農林産物生産量低下の推移がどこか重なっているように思える。人の生活圏縮小と動物の活動域拡大は負の相関のようにも思える。生態学的にみると人と動物の生活圏の置換が静かに進んでいるのか。私たちはそれを自然の流れと割り切っているのだろうか。

動物問題は地域ごとで様々だ。秋田では人の暮らし、安全にも直結するクマが何ととっても最大の問題だ。クマが人の普通に暮らす場所に出没するという事は、クマの生活圏の自由度が高まっていることを物語っている。

一方、全国で問題になるシカやイノシシは秋田が雪深いこと、また周囲を山に囲まれた地形であることからほとんど目撃情報がなかった。しかし、近年シカとイノシシの目撃情報が相次ぎ、不気味な動きを感じる。参考の話だが、お隣の岩手県の場合を見ると2006年まで県南のほんの一部にしかいなかったシカが、10年後には全県に拡大、現在の推定生息数は4万頭にも増

え、対応に苦慮する始末だ。人口減が進む秋田も侮ってはいけない。温暖化での積雪量減少が進むと爆発的増加も心配される。

秋田県文化財保護協会発行の「出羽路」152号に秋田の歴史研究家、半田和彦氏が佐竹藩時代の男鹿半島辺りのシカ駆除記録を紹介している。藩は農民からの農業被害の訴えに対応するため、各地のマタギの力も借り何度も大掛かりなシカ狩りを行ってきた。一回の駆除頭数が時に千頭単位に及ぶ記録もあり、当時のシカの多さには驚かされる。歴史はシカを侮れないということを教えている。動物たちに好き勝手に楽園を与えてはいけない。節度を守ってもらい仲良く生きるのが日本流だ。

さて、その動物対策に妙案はあるのだろうか。なかなか難しい。キーになるのは、やはり動物と向き合ってきた農山村の元気であろう。直接的な頭数管理や侵入防止策は不可欠だが、それには限界がある。動物の戻れる環境を改めて考えることと、動物と持続して対峙し、押し戻すための元気な農山村の再生、農村づくりが不可欠だ。

既に農山村の動物対策は国や各自治体は様々腐心し、対策を講じているようだが、低迷する農林産業の活性化に抜本的で骨太なテコ入れを行うことで中山間地の農山村の再生ができないだろうか。食料自給率や木材増産の改善、国土と景観の維持、水の保守、人材育成の環境、農山村には多くの機能を果たしてもらわなければならないのだ。総合的な策で農山村の経済再生がないものだろうか。農山村がスカスカになり、動物のすみかになってしまっただけでは、先人が自然と向き合い築いた国土が荒れて消えて行く。

動物問題はそんなことを教えてくれている。